

# 虹の架橋

## 今月の題字

土田 弘さん

(みどり市大間々町)

小学校から65年来の幼馴染み。ながめ黒子の会の大番頭(金庫番)として活躍、四季折々の落語会のキャッチフレーズの俳句も弘くんが担当してくれています。

虹の架橋を探索で、インターネットからでもご覧いただけます。

小耳にはさんだ いい話  
(文責・菊) 《349》



みどモス&ぐんまちゃんショップ  
さくらもーる2階にオープン  
八月から、さくらもーる2階のアスクの隣に『みどモス&ぐんまちゃんショップ』がオープンしました。みどり市のマスコットキャラクター『みどモス』は、みどり市のマンモスという意味。今から35000年前、日本にマンモスが生息していた時代には人間は住

んでいなかったという考古学の常識を覆したのが相沢忠洋さんの『岩宿の発見』であり、相沢さんが発見した旧石器時代の資料が今年、国の登録有形文化財に指定されました。



みどり市で2011年から毎年実施しているチャリティークールビズ・ポロシャツの今年のデザインは岩宿遺跡を発見して喜ぶみどモスが刺繍されています。ポロシャツは税込1800円。そのうちの300円が能登半島地震の被災地へ義援金として送られます。『みどモス&ぐんまちゃんショップ』では、ポロ、Tシャツの他、トートバッグ、ハンカチ、タオルなども販売。みどり市の名誉市民第1号の星野富弘さんの詩画ハンカチも6種類あります。各種団体のお揃いの名入れポロ、Tシャツも足利屋・アスクで承ります。

## 岩宿の発見

山活動などが活発でヒトが住める環境ではなかったと言われ、発掘作業の際に関東ローム層にあたるそれ以上掘ることはありませんでした。相沢さんは石器を持つ考古学者を訪ね、関東ローム層の中から石器が出土した事実を説明して回りましたが相手にされず、地位も学歴もない相沢さんに対して「行商人風情が」などと誹謗中傷され続けたそうです。しかし、相沢さんは調査を続け、昭和24年の夏、誰が見ても疑いようのない黒曜石の石槍(槍先型尖頭器)を岩宿の関東ローム層の中から発見したのでした。そして、明治大学を中心とした発掘調査隊が岩宿

遺跡の本格的な発掘を実施し、縄文時代より1万年以上も前に日本に旧石器時代があったことがようやく証明されました。しかし、その時の新聞には相沢さんの功績は記されず、単なる調査の斡旋者として扱われただけでした。それでも相沢さんの考古学への情熱は冷めることなく、地道に調査を続け、数多くの旧石器遺跡を発見し続け、日本の旧石器時代の存在を発見した考古学者として正當に評価されるようになり、昭和42年には第1回吉川英治文化賞を受賞

しました。相沢さんは『岩宿』の発見の本の中で、『古代人の一家団欒の場で使われた石器を見ると夫婦、親子などの人間関係への郷愁と思慕を感じた』と書いています。不遇な少年期を過ごした相沢さんにとって、古代人の一家団欒の姿が考古学研究の原動力だったのかもしれない。岩宿博物館では9月23日まで『岩宿人のくらしをさぐる』という企画展を開催中。相沢さんが行商で使っていた自転車なども展示されています。



## 世界一小さな 足利屋 トイレ美術館



今月の絵 《349》  
松本真由美さん『バラとジョウビタキ』

現在、岡山県にお住まいの松本真由美さんは、2007年6月から文通を始めて17年が経ちました。一度もお会いしたことはないのですが、毎月『虹の架橋』を熱心に読んでくださり、感想や近況と共に、水墨画のハガキを送っていただいています。倉敷に通って、水墨画の巨匠・藤原六間堂先生に指導してもらっているとのこと、習い始めて3年目とは思えない素晴らしい作品ばかりです。今回、トイレ美術館で紹介する『バラとジョウビタキ』は、縦40センチ、横32センチの顔彩を使った水墨画。足利屋で実物の作品を是非ご覧ください。

## 靖ちゃん日記

令和六年八月十五日(木)  
大間々中でコロナ以降五年ぶりに開かれた「ラジオ体操会」に参加。六十年前、ここは大間々小学校だった。夏休み中は姉弟で首から出席カードを提げて体操し、判を押してもらって、夏休みの終わりにノートや鉛筆をもらうのが楽しみだった。三十年前は我家の子供と一緒に参加した。ラジオ体操は、昭和三年に昭和天皇が即位されたのを記念して始まり、大間々のラジオ体操会では日本で二番目に結成された歴史ある体操会だという。六十年前は、この校庭に子供が溢れていた。今朝の参加者は六十名ほどだったが子供は一人もおらず、ほとんどが同世代の高齢者ばかりだった。長い歴史を誇る大間々の体操会を存続させるためにも何とか子供を増やさなければならぬと思ったが今朝の顔ぶれを見ると子供を産めそうな人も、産ませられそうな人もいなかった。でも、みんな楽しそうで、重い体型の割には、口も軽く、尻もちそうだった。

令和六年八月十六日はお盆の飾り物を、キュウリの馬とナスの牛と共に庭で燃やします。都会ではこんな昔ながらの風習も出来なくなっているかもしれない。今年の送り火は孫がマッチを擦って送り火はいつの日か自分も送り火に送られる日が来ると思いながら天まで昇る白い煙を見上げていました。お盆という風習は、年に一度、ご先祖様の魂が我が家に帰って来る日。お盆中は行き場のない無縁仏もお迎えしてご飯をお供えすると教えられました。そんな優しさが感じられるお盆の風習を次の世代に伝えたいと思っています。

